

「軽くみていた…」



「口ナの後遺症」悩む高校生の野間美帆さん＝東京都文京区で

# 後遺症 16歳に重く

新型コロナウイルスに感染

に応じてくれた。

後、後遺症に悩む人たちが多い。東京都文京区の都立高校二年、野間美帆さん（さは）は、感染から半年たった今も倦怠感や息切れが続き、学校に毎日通えない。「軽くみていた。こんなにひんどいとは…」。

二十歳未満の感染割合が増え、中、同世代にも現実を知つてもらいたいとの思いで取材

感染対策はしていたはずだ

った。思い当たるのは通学の満員電車くらい。今年三月に突然発熱し、PCR検査で陽性が判明した。同居の家族は陰性で、ホテル療養をする」と

とに。次第に味覚と嗅覚はな

くなり、頭が重いからして起き上がりがないほど状態は悪化。療養生活は十日間に及

んだ。

だが、本当の苦しみは、ホテルを出た後に始まった。野間さんは、少しかすれた声で「全身のだるさが抜けなくて、食べては寝ての繰り返し。ちょっと動くだけで微熱が出てしまつ。『自分は人と違つんじゃないか』と思い、外に出るのが怖くなつた」と振り返る。

その間も、クラスメートたちは、学校生活を普段と変わらず送っている。「隣いでいかれちゃう」と焦りが募り、リハビリを兼ねて家の周りを歩いてみると、なぜか涙がこぼれ落ちた。後遺症外来では「うつ状態の可能性」と言われた。

担任教諭の勧めで、スクールカウンセラーのカウンセリングを受けることを決め、六

月

月から週一回の面談を重ねた。つらい思いを打ち明げるうかた、気持ちは少し楽だ。いつしか味覚や嗅覚も戻つて

いた。

一学期から登校できるようになつたが、体のだるさや微熱は続いており、休み休みでしか通えない。当面の目標は、「一週間続けて登校する」とだ。

野間さんは陽性と分かつた当初、「あ、かかっちゃつたんだ。なんでだろう」と思つた程度で、大きな動搖はなかったという。「十代はせいぜい軽症」と聞いていたからだ。まさか、つらい療養生活と、いつ終わるとも分からぬ後遺症が待つて居るとは夢にも思わなかつた。

野間さんは同世代にこう呼び掛ける。「最近はコロナに慣れちゃつたのか、大人數で遊んだり会食したりする人もいる。でも絶対に軽くみてほしくない。かかつた後も本当に大変ですから」

新型コロナの後遺症 新型コロナの感染から回復した後も残る症状。厚生労働省が6月に公表した中間報告では、陽性判定から十日が経過した人の21人に後遺症（倦怠感など）が見出された。

左中力低下や脱毛、嘔吐や嘔気などの報告されている。都世田谷区は一月、「後遺症がある」と回答したのは30~50代が半数超、10代は3割とするアンケート結果（速報値）を発表している。

## 半年後も倦怠感、息切れ

半年後も倦怠感、息切れ

の状態が続く。学校生活を普段と変わらず送っている。

「隣いでいられちゃう」と焦りが募り、リハビリを兼ねて家の周りを歩いてみると、なぜか涙がこぼれ落ちた。

後遺症外来では「うつ状態の可能性」と言われた。

担任教諭の勧めで、スクールカウンセラーのカウンセリングを受けることを決め、六